オオムラサキ　*Sasakia charonda charonda* (Hewitson)

【選定理由】

日本最大のタテハチョウであり、低山地から高地にかけて生息地は点々と存在しているが、近年、混交林の繁茂などにより生息環境が悪化し、その個体数が減少している。しかし、瀬戸市などでは近年個体数の若干の増加がみられる。

【形　態】

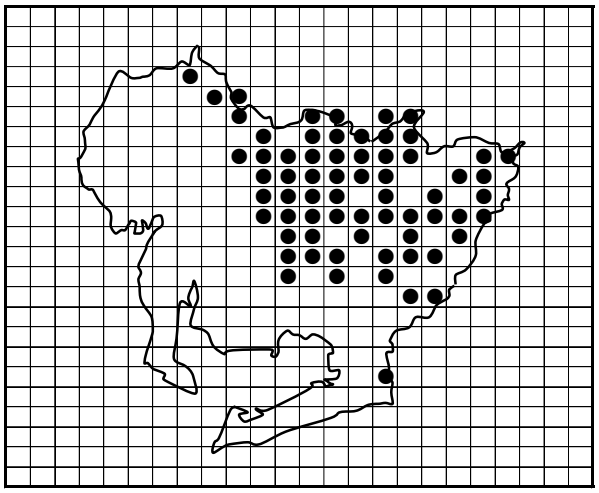
♂の前翅長は 55mm 程度で、翅の地色は♂♀とも暗褐色、♂は前後翅の基半分が紫色に輝くが、♀はこれがなく、やや大型で翅形が丸い。越冬幼虫は、ゴマダラチョウとともに落葉の裏面に発見されるが、ゴマダラチョウより小さく、より細長く、背面の突起が 4 対あることにより容易に判別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地区の名古屋市（加藤, 1942）、春日井市（高橋匡司, 未発表）、瀬戸市、三河地区の豊田市、岡崎市（旧岡崎市、旧額田町）（大曽根, 2006）、新城市（旧作手村、旧鳳来町）など低山地の雑木林から高地まで広範囲にわたって記録がある。

県内分布図



【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布、北海道では産地は局限されている。東京付近は、開発のために産地は大幅に減っている。日本西南部の暖地では、主に山地帯のみに産し、多くはない。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、ベトナム、台湾に産し、東アジアの固有種である。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地や河岸段丘の雑木林に生息している。年 1 回の発生で、6 月中～下旬から発生する。樹上を高く飛び、好んでコナラなどの樹液に集まる。幼虫の食樹はエノキである。幼虫は、根際に降りて落ち葉の中で翌春の新芽時まで越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

雑木林に生息している。市街化の促進、工業用地開発などによる生息地の消滅や、雑木林の管理放棄などによる混交林の繁茂が進み、生息環境が悪化し、個体数が減少している。エノキが生育している河畔林も、山間地の荒廃に起因した増水のため、根際の越冬幼虫が流されたり埋もれてしまい個体数が減少してしまう。

【保全上の留意点】

里山や河畔の混交林の定期的かつ継続した間伐などによる生息地の保全管理。住民や地域の小中学生による、公有地や社寺にあるエノキの根際で越冬する幼虫の保全のための落葉の飛散防止活動や、放蝶による遺伝子撹乱防止の啓蒙教育の実施などが必要である。

【特記事項】

本種は大きく、♂の翅表面は、紫色の光沢が美しいこともあり「国蝶」に指定されている。

【引用文献】

加藤一三, 1942. 学林, (117): 61-66.
大曽根 剛, 2006. 愛知県男川流域におけるオオムラサキとゴマダラチョウの分布調査. 佳香蝶, 58 (226): 38-40.

【関連文献】

白水 隆, 2006. オオムラサキ. 日本産蝶類標準図鑑: 241. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 271. (財)旭高原自然活用村協会.
高橋匡司ほか, 2005. チョウ目チョウ類. 豊田市自然環境基礎調査報告書(資料編): 285. 豊田市.
寺部謙一, 1977. 愛知県豊田市産オオムラサキのスギタニ型の記録. 佳香蝶, 29 (109): 11.

（2009 年版を一部修正）